

三歳すみれ物語（その2）

「つながる・つなげる」

この四月に新たに出会った三才の子どもたちとの八ヵ月余りの幼稚園での暮らしの中で、つながったりつなげたりする活動が実に多く生まれてきたことに気づきました。四月の頃の戸惑いと緊張の時には、家から持ってきた小さなおもちゃを握りしめて登園する人や、幼稚園のにわとりにあげるための野菜を入れたビニール袋を毎日のようにぶら下げてくる人の姿が目立っていました。今思えば、これがつなげる活動の第一歩だったのかも知れません。家庭のぬくもりが感じられるものをお守りにして、幼稚園という未知の世界へ自分をつなげる——小さなおもちゃが、家から持ってきた野菜が、挑太郎のき

村松 三恵子

びだんごの役割を果たしていたようにも思われてきます。

また同時にその頃は、道すがらに摘んだ草を私に届けてくれたり、描いた絵を切り抜いては「せんせーにあげる」と言って持ってきてくれたり、文字らしき線を描いては「せんせいのなまえだよ」と言って微笑んだり。

——様々な形で保育者とのつながりを確かなものにしようとする子どもたちの動きが多く見られた時期でもありました。

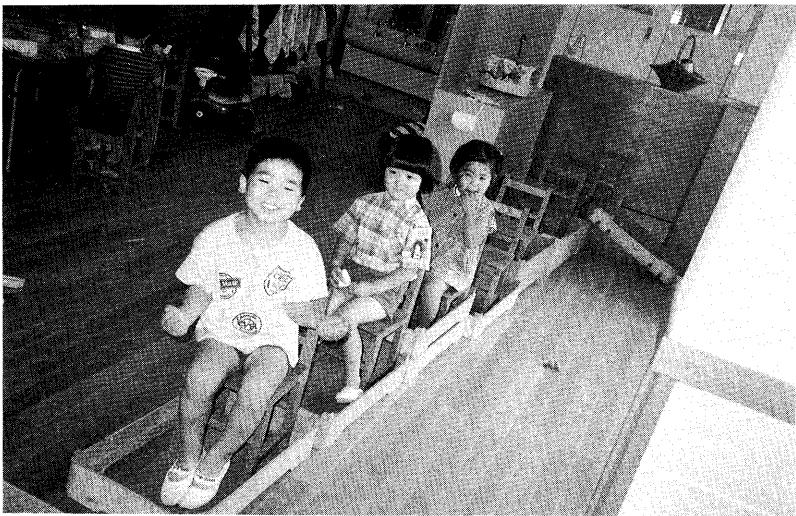
6月になるとそのつながりの心は友だちの方へと向けられていきました。電車の運転手になった人にお客さん

がつながる、仲良しになった人と手をつなぐ、ブロックをつなげて友だちと同じ形の剣をつくり、ひと固まりになったり、連らなって走り回ったりする姿……。それぞれの人の笑顔の中に友だちとつながることの喜びがあふれていました。もちろんこの頃になると、物を取りあったり、互いの思い違いがけんかを巻き起こしたりと、共にいる時間が増えるにつれて、そういった負のつながりも頻繁に生まれました。

今回、ここでご紹介する三つのエピソードは、いずれも実りの時期を迎えてからの「つながる・つなげる活動」です。それぞれの遊びを通して、そこにかかわる子どもたちの大切な成長という名の実りを収穫できたように思っています。

「紙をつなげるその心」

九月一六日、紀彦君は細長い紙を出してきて、セロテープでどんどんつなげはじめました。紙が一m半程の長さになると、その紙の端を持って、床にひきずってあち



あつし（巧技台での電車ごっこ）

こち歩きはじめました。お弁当の後も、そのつなげた紙を手にして外へ。心地好い風に紀君の紙のテープがなびいて揺れました。それを見て紀君が「ウチャー！」と嬉しそうに声をあげました。

その頃からです。紀君の「友だちとつながりたい」という思いが強くふくらみはじめたことを感じたのは！とにかく近くにいる人にさわってみたり、隣の人の粘土を指でつついてみたり等々……。不意に傑作の粘土製のへビをつつかれた人が、びっくりして怒り出してしまうようなことも度々でした。その度に、粘土がつぶれてしまったり、また、紀君が仲良しになりたいと思ってそうしてしまったり、又、紀君が仲良しになりたいと思ってしまうように心がけました。何とかそのぶつかりあいを生かして、紀君の「友だちとつながりたい」という思いを実現してあげたかったのです。

そして、一月一〇日、粘土遊びのやりとりをちょっとご紹介しましょう。皆、手をたくみに動かしながら、



なお（友だちと手をつなぐ）

楽し気におしゃべりをしています。

紀彦「ハッシャー！ バキバキバキ……くさりがあった。ガチャーン！ ここ、まがってんの。いまタイム、タイムなのね」

渉「ひやくまんえん（百万円）て、ほんとにあるんだよ。」

紀「えへへ、ひやくまんせん（百万円）。ホラ、おかねのかたちになった」といって、丸めた粘土をつぶしてお金の形にします。

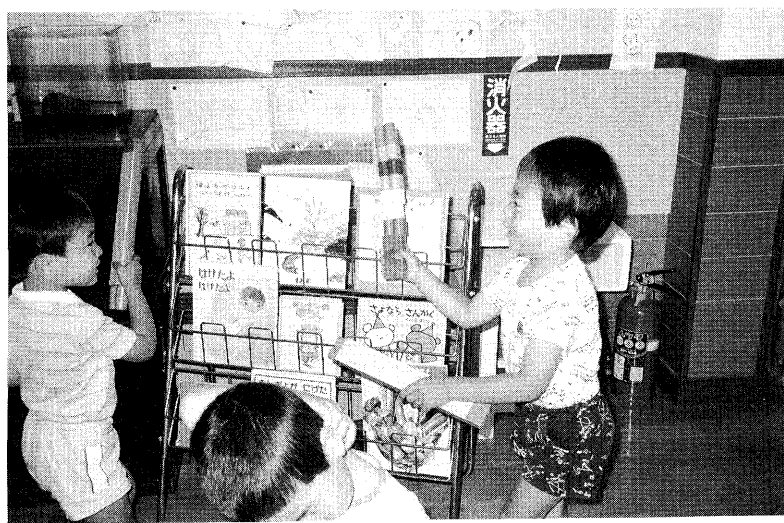
功志郎「ここね、はいったらいけないんだよ。ここね、きょうりゅうのせかい。」

紀「えー？きょうりゅうのせかい？」

功「これが、きょうりゅう」

紀「ババー、ドドドドー」

という具合。ひとにぎりの粘土が、リズムカルな言葉のやりとりに合わせて、様々な形に変化していきます。この言葉のキャッチボールの中に、紀君の成長の姿が顔を覗かせていました。友だちの反応に注意しながら、曲が



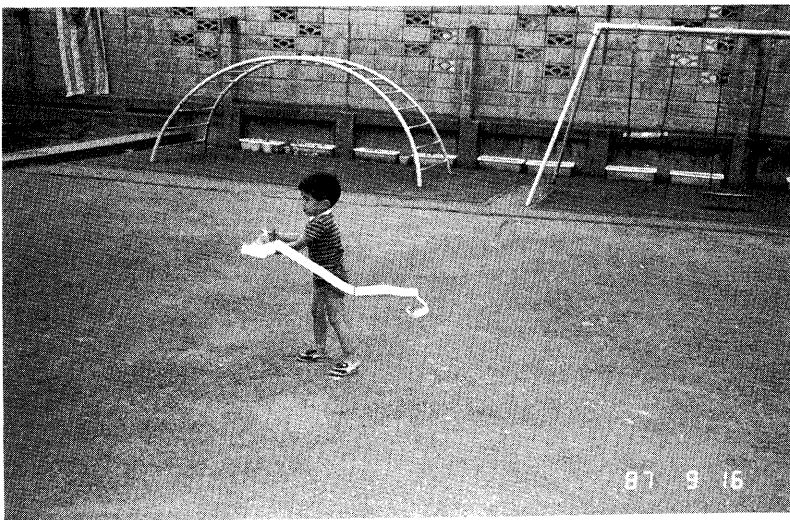
こうしろう（戦いごっこ）

っていることや、タイムをしていることなどを伝えたり、渉君の「百万円」の発想を自分の中に取り入れて粘土で表現したり、功志郎君の「恐竜の世界」というアイディアを確認したり……。人と調和して暮らすための力が身につきはじめている！ 紀君が友だちとしっかりとつながっている！ そんなことを確信できた嬉しい一コマでした。

「つながった手と手」

一〇月二七日、篤志君は、レッドマスクのヘアーバンドをして、すみれ組の出入口のところにポツンと立っていました。すみれ組でしばらく続いていた「マスクマン旋風」はどこかへ吹き去り、皆それぞれ目的をはっきりと持って、いろいろな遊びに取り組んでいます。少し前までは、マスクマンのヘアーバンドをつけると、友だちが磁石のようにくっついてきたのに……。

「あっちゃん、誰かと遊びたいのだったら私も一緒に言っておあげるから、おしえてね」と私が言うと、彼は部



のりひこ（紙をつなげる）

屋の中を上目使いに見回しながら「あっちゃん つみき
もしない……えのぐもしたくない……おままごもしない
い……」……そんな風に言うのです。彼が言葉にしたど
のコーナーも、三、四人の人が活き活きと動いていま
す。私には、あっちゃんが友だちと一緒に遊びたい気持
ちを反対の言葉で表しているように思えました。——そ
こでちょっと強行作戦。「ふーん、そうかあ……。幼稚園
はさあ、遊ぶことがお仕事だから、何して遊びたいの
か考えられない人は困っちゃうんだなあ」……しばらくし
て、あっちゃんがボソッと言いました。「……すべりだ
い……」と。すべり台には誰もいなかったけれど、わず
かでも前向きに歩もうとした彼の心を受けとめて、手
をつないで外にでかけました。

外は秋晴れ。めずらしく閑散とした園庭に秋の陽がふ
りそいで、すがすがしい空気。砂場の方に目をや
ると、大きなスコップを手にした真平君が穴を掘りはじ
めるところでした。穴掘りの手伝いをしてみないかと尋ね
る私に、あっちゃんは、うなずいて、ゆっくりと砂場へ



あつし、しんぺい（砂場で）

と歩く私の手につなぐてきました。真平君の快い返事を受けて、私は小走りにスコップを二本取ってきて、その一本をあっちゃんにあげました。「さあ、真平君、あっちゃんシャベルカーは力持ちだから、大きな穴がほれるねえ！」と私。

穴をほる。掘った砂を置いたところに山ができています。山を固める真平君。シャベルでどっさり砂を運ぶあっちゃんの口もとから、「ほーら、こんなにとった！」と、喜びに満ちた声が生まれはじめました。穴ほりがいつのまにか山つくりになっていきました。年長のお兄さんが二人の山にトンネルを作ってくれました。「ほーら、つながった！」のお兄さんの声に「どこどこ？」と大きな声をあげるあっちゃん。「真平くんとおっちゃんの手いれてごらん。つながるんじゃないかな？」と私。——二人の手が砂山のなかでしっかりとつながりました。その時のまぶしい程の笑顔！

砂場は、すべり台とはまったく逆の方向にあります。私の援助があったとは言え、あっちゃんが砂場に向かっ



なお（なかよしブランコ）

て歩んだことには大きな意味があります。すべり台に向かうことが、彼の煮え切らない心の象徴とすれば、砂場の方に歩むということは、彼がその煮え切らない心を自ら遠ざけて、新たなステップをしようとする潔（いさぎよ）い心の象徴と言えるでしょう。

砂山の中でつながった手と手、そして、笑顔！——人に対して自分の心を表現することが苦手だったあつちゃんも自分の壁を乗り越えて得た大切な宝物です。あつちゃん、自信を持って頑張ろうね！

「見えない糸」

十一月十八日、この日は勤労感謝の日に因んで、幼稚園で身近に働いてくださっている方々に差し上げるために、皆それぞれに果物や野菜を家から持ち寄りました。奈緒ちゃんはいつも庭をきれいに掃いてくださるおじちゃんのために、果物を入れるビニール袋に色セロファンを貼ったり、マジックで描いたりする活動に取り組んでいました。製作用に用意されたテーブルの上のビニール



袋に心を集中させて、一生けんめいに打ち込んでいました。ままごとコーナーの方では、映画の主人公（キョンシー）になって、ピョンピョンと躍ねまわる人たち、賑やかな歓声があがっていました。これは最近になって流行りだしたゲームで、キョンシーに肩を噛まれると、皆キョンシーになってしまうのですが、噛まれそうになった時に鼻をつまむと噛まれないで済むという内容のものです。

黙々とビニール袋の装飾に打ち込んでいた奈緒ちゃんが、突然鼻をつまんだのです。何だかとても不思議な感じでした。彼女の傍らをキョンシーになっている功志郎君が通り掛かったからです。彼女は、自分とは全く別のことをして遊んでいる人の遊びをしっかりと受け止めるながらそこに存在していたのです。私は、鼻をつまんだ奈緒ちゃんが目には見えない糸で周囲の人とつながっていることを感じました。

ビニール袋の装飾を終えた奈緒ちゃんが、外でブランコに揺られていました。保育室から見ると一人でブラン

コに乗っている風に見えます。そっと近づいてみると、その手には昨日作った木片製のトランシーバーが、ブランコの鎖と一緒に握られていました。隣でブランコを揺らしていた人の手にも。その時、ブランコからは程遠いすみれ組の建物の裏手の方から二、三人の人が勢いよく走り出してきました。その中の一人がやはり木片製のトランシーバーを口にあてて「おうとうねがいいます」と繰り返し返しています。その声を聞いた奈緒ちゃんは急いでブランコを止め、トランシーバーを口もとにつけて何やら言葉を返しています。かと思うと走り出してきた人も、ブランコに揺られていた二人も皆一丸となって仲良しブランコ（四人乗り箱ブランコ）に乗り込みました。ブランコがリズムカルに動きはじめます。

私「応答ねがいます。どこへ行くんですか」

Y「かいじゅうえきでーす」

K「オーッ！」

Y「かいじゅうえき、かいじゅうえき」

K「オイ、やっつけてこい。あとでたすけてやる！」

Y「オーッ！ トランシーバーでよんだらたすけにきてくれ！」

そう言って勢いよくブランコから飛び出していくY。奈緒ちゃんはそのなやりとりを聞きながら、ブランコが揺れるたびに目の前に近づく緑のひも（ブランコの鉄柱のところに結ばれていた）を引っ張ってはニコニコと笑っていました。“心と心がつながっている”……そんな風に思いました。離れたところにいるても、実は皆の心が一つのテーマでつながっていたのです。仲良しブランコからは皆の歓声（時には“うんこの駅”なんていうアイディアに大はしゃぎをする声も……）が、いつまでも聞かえていました。

この遊び方からは、見えない糸で結ばれている質の高いつながりの形が受けとめられたような気がしました。建物の裏手にこもる人、ブランコに揺られている人……それぞれの参加の仕方を互いに認め合っている——仲間であるからといって、自分とは違う参加の仕方をする友だちの動きを束縛しない、離れているからといって仲間

じゃないなんて思わない、そしていつでも一つになれる……私は仲良しブランコに揺られている嬉々とした子どもたちの姿を目にしながら、これが元町幼稚園の本当の自由の姿なのではないかしらとしみじみと思ったのです。

現場での保育、家事、育児、おまけに妊娠9ヶ月という今の私は“振り返る時”をゆっくりと持てないままにこのような原稿を書いています。受けとめ方考え方が浅いところは、お読み下さった皆様に補っていただければ幸いです。あと一カ月余りでこの世にお目見えする赤ちゃんが、お腹の中で元気に動いています。そう言えは、お腹の中でもしっかりとヘソの緒でつながっているのですね。さてさて、お腹の中の赤ちゃんはこの世に生まれ出てヘソの緒とのつながりを断ったあと、家族や家庭をはじめとして、様々な人や世界とどのようにつながっていくのでしょうか。

（元町幼稚園）